

# 野外活動で ふれあう心。

中学生の集団宿泊教室に同行して

ママさん特派員 合志重子

子供たちは、各人各様夏休みならではの生活体験をして、九月の新学期を迎えたことと思います。

その体験の一つとして、阿蘇郡、蘇陽中学の一年生(四十八名)の皆さんは、菊池高原で七月二十四日から二泊三日の集団宿泊教室を行いました。私は、その様子を見せていただくため、同行しました。

この集団宿泊教室は、昨年度から県が実施しているもので、昨年度は県下中学一年生の全学級の三分の一程度、今年度は三分の二程度を対象に実施されています。

県は、今年を「人づくり元年」と位置づけ、今後、教育には特に力を入れていく方針だそうです。その一環として、先生と生徒の心のふれ合いの場となる野外の集団宿泊教室にも力を入れているということですね。

従来、PTA主催など、自主的な野外活動はありましたが、この集団宿泊教室では、野外キャンプを学校行事として組み入れ、一部経費の予算措置もするといったもので、教育現場で実施し易い環境をつくるという点で前向きな姿勢が見られます。

## 一人ひとりの自主性を尊重することは 個性を育む指導の、一歩ですね。

四時過ぎからは夕食の

仕度。男女混合の班ごとかまどを作り、飯ごう炊飯とカレー作りにとりかかりました。日頃の手伝いの経験を生かし馴れた手つきで準備する子、失敗して大声をあげる子と様々。それでも空腹を抱えてのチームワークはなかなかのもので、悪戦苦闘の末、陽が傾く頃には、あたり一面においしい匂いが立ち込めました。

引率者は、教頭先生、担任二名、応援一名の計四名でしたが、宿泊教室での先生方のご苦労は想像以上に大変なもの。私も保育園に勤めていた頃、園児をキャンプに連れて行った経験がありますが、子供たちが小さいこともあって、危険な目に合わせないことだけを考えていたようです。ところが、中学生ともなると、それだけではすみません。生徒の自主性を尊重しながら、一人ひとりの個性に合わせた指導が行われていることには頭が下がりました。

「ここでは生徒が、学校で見られない意外な面を見せてくれるんですよ。」と若い先生も新しい発見をすることが多いようです。

また、教頭先生は、「この中学には、七つの小学校から小人数ずつ入学してくるため、生徒に少し引込み思案な面があります。このキャンプを機会に少しでも積極性を身につけて欲しいと思っています。」と学校の特殊事情を説明してくれました。



キャンプの火を囲んで、歌ったり、遊んだり。



みんなで作ったから、おいしいおいしい♪



あの星座は何だっけ... きれいだなぁ。



いつもお母さんの手伝いしてるから大丈夫!



お行儀よく食べてますよ。



力をひとつにして、食事の準備です。



教頭先生自らテントの張り方を指導。



生徒と一緒にテントを張る合志さん。

## 日常と異なる環境に よって生活経験が 広がったようです。

キャンプ場に到着した一行は、開営式のあと、班ごとのテント設営に入り、二泊三日の宿泊生活が始まりました。

蘇陽中学は、宮崎県に接した標高五百〜八百メートルの山間の町にあり、生徒数は百六十二名です。

阿蘇にもキャンプ場はありますが、あえて菊池高原を選んだ理由は、生徒の希望を重視し、生活経験を広げるといふことから、日常の生活環境とは違った場所を選んだということでした。

川遊びの経験のない者が多いことから、二日目の日程は、菊池溪谷へのハイキング、魚釣りや川遊び、自然林の観察等が中心となっていました。

また、町の協力でスクールバスが利用できたこともあって、生徒の費用負担が軽くなり、ここまで足を伸ばすことができたということでした。



## 集団生活の中に「人づくり 教育」が生かされていました。

翌朝は六時起床。ラジオ体操のあと、少しは馴れた飯ごうで朝食。きびきびとした動きを見せてくれました。

溪谷までの道のりは片道五・五キロ。歩きながら、農作業の手伝いのこと、山の暮らしのことなどを生徒たちと話し、すっかり仲良くなりました。溪谷で別れを告げましたが、久しぶりのキャンプで感じたことは、集団生活が、これ程まで打ちとけた人間関係をつくってくれるものかという点でした。教育問題を考える以前のもっとも大切な人間関係がそこにあるような気がしました。

中学校ともなると各教科の授業時間数の確保、諸行事との調整等で、こうした集団宿泊教室の実施時期には、各校とも頭を悩ませるとの話を聞いたことがあります。

しかし、今回同行してみて、こういう形の授業こそ、将来必ず役立つ生きた勉強だと強い確信を持ちました。

この集団宿泊教室が、早く県内中学一年生の全学級に及ぶことを期待します。